

- WAVE / 「できない」は楽しい! _____ 中里 優… 3
- 羅針盤〈第70回〉新『小学校学習指導要領』告示
- ① 新学習指導要領 ここがポイント! _____ 白旗 和也… 4
- ② 新学習指導要領 授業づくりのQ&A _____ 白旗 和也… 7
- 実践報告① / 〈「デジ体」を使った授業〉5年生・マット運動 (東京都中央区)
- ・児童が「できた!」と感じる学習活動の工夫 _____ 小林悠里子…10
- 実践報告② / 6年生・ネット型ボール運動 (埼玉県川越市)
- ・「わかる・できる・かかわる」を保障する てのひらテニスの実践 _____ 田中 正徳…14
- Live Lessons 〈第4回〉 / 3年生・10秒間走 (東京都杉並区)
- 授業者: 齊藤 慎一 / 講評者: 鈴木 聡…18
- 連載 / 外野席から 〈第43回〉
- ・スポーツの神様を垣間見た! _____ 岡崎 満義…24
- [新コーナー] こんなとき、どうしよう?
- ・体育の授業づくりQ&A _____ 鈴木 聡…26

※本文中に表記の勤務校は、平成29年5月末日のものです。

◆◆◆ 著者紹介 ◆◆◆



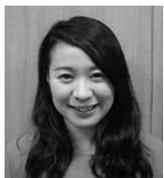
白旗先生◆昨年度より JICA の技術顧問に就任し、発展途上国の体育の普及に努めています。東アフリカ方面のウガンダを中心に 50 年かけて体育を推進予定です。いっしょにやってみたい人はいませんか。



田中先生◆子どもが笑顔で活動する授業づくりを目指して日々取り組んでおります。そのために、自分自身が少しでも体を動かして、運動の楽しさや魅力を忘れないように心がけています。「初心忘るべからず」。



齊藤先生◆最近、AI (人工知能) の話をあちこちで聞きます。技術革新による合理化と正確さに驚くと同時に、うまくいかないことも認め合えるスポーツの価値、それを子どもたちに教える大切さを感じています。



小林先生◆本校では体育の研究を進めています。昨年度に行ったデジ体を用いた教え合い・学び合いを生かして日々授業を行っています。子ども達が意欲をもって活動し、「できた!」と実感できるような授業づくりを心がけています。



鈴木先生◆毎朝ジョギングをしています。やせるためとか運動不足解消のためではなく、純粹に走ることを楽しんでいます。今まで何度も挫折しましたが、「気が乗らないときはいいや」と、ゆるい気持ちで愉しく続けています。



©TOKYO VERDY

「できない」は楽しい！

中里 優

サッカーを始めたのは小学1年生の頃で、仲がよかった女の子に誘われたことがきっかけでした。家族がサッカーをやっていたわけでもなく、今思えば偶然の出会いという感じですが、もともと運動が大好きだったのですぐにサッカーに夢中になりました。体が小さく、足もそんなに速くありませんでした。周りは男の子ばかりだったので、始めた頃は何をやってもいちばん下手でした。でも、「負けたくない」という気持ちから練習を重ね、その分どんどん上達していくのがうれしくて、練習がある日はいつも楽しみでした。

中学で日テレ・メニーナに入ると、一段と高いレベルになり、壁にぶち当たってばかりでした。同世代の他の子のほうが脚光をあびていて、自分は代表に選ばれないといった悔しさもたくさん経験しました。試合に出られない悔しさはいちばん大きいですし、ライバルたちの活躍を見るのはつらい。でも、私は相当な負けず嫌いなので、いつか絶対抜かしてやるぞ、と。体が小さいことを言い訳にしたいくはないので、自分がこの体で生き残っていくためにはどうしたらよいかをずっと考えてやってきました。悔しい思いをいっぱい経験したからこそ、ここまでくることができたのだと今は思います。

たくさんの壁にぶつかりながらも、サッカーを続けてこられたのは、なでしこジャパンに入って世界で戦いたいという夢があったからです。また、最近では応援してくれている人の存在が大きいと感じています。はじめは反対していた母も、今ではアウェーの試合でも必ず見に来てくれますし、学生時代にお世話になった先生がテレビで見て連絡をくれたりします。そうやって応援してくれる人たちに、活躍している姿を見せたいという気持ちが、大きな原動力になっています。

なでしこジャパンに入ることは夢の1つだったのですが、大きな目標はもっと先にある。今はまだその通過点だと思っています。目標は、なでしこジャパンの一員として世界で一番になること。2019年にはW杯、2020年には東京オリンピックがあります。そのときに、なでしこジャパンに定着していただけるように頑張っていきたいです。

将来は、指導者よりも教員になることに興味があります。大学時代には高校へ教育実習にも行きました。授業が終わった後、生徒に「楽しかったです」と言ってもらえたのは特にうれしかったです。同時に難しさも痛感しました。はじめからある程度モチベーションをもった子に教える指導者とは違って、教員は運動が嫌いな子にも教えなければいけません。運動が嫌いな子に、どうしたら興味をもってもらえるのか。とても難しいですが、そこがおもしろいところなのだと思います。

運動が嫌いな子は「できないからいやだ」と言いますが、私にとっては「できないからこそ楽しい！」。サッカーを始めてから、数えきれないくらいの壁にぶち当たりました。でも、それを乗り越えることで、ここまでくることができました。できないことを否定的に捉えるのではなく、できないことにチャレンジしていくことが本質的な運動の楽しさ・おもしろさにつながると私は思います。正解がないからこそ個性が生かせるし、弱みが強みにもなる。そういったことを子どもたちに伝えられるようになりたいです。(談)

なかと・ゆう／一九九四年東京都府中市生まれ。七歳よりサッカーを始める。二〇二一年より日テレ・ベレーザに所属。二〇二二年U20日本女子代表の一員として、FIFA U20女子ワールドカップ3位。二〇二六プレナスなでしこリーグカップ1部優勝。ほかタイトル・代表歴多数。二〇一六年高倉麻子監督率いるなでしこジャパンに初選出。



その1 新学習指導要領——ここがポイント

日本体育大学教授 白旗 和也

1. 体育科の改訂を理解するために

(1) 新たに示された、育成を目指す資質・能力

平成29年3月末に新たな学習指導要領が告示された。当然、体育科では何が変わったのか関心の高いことであろう。しかし、今回の改訂では教科だけを見ていたのでは改訂の本質が理解できない。実際、体育科だけを見ると大きく変わった点がありませんように見えるが、字面だけを追わず、教育全体を貫く改訂のポイントに触れておきたい。

小学校学習指導要領総則（以下、総則という）第1の3には以下のように示されている。

豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、道徳科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動（以下「各教科等」という。ただし、第2の3の(2)のア及びウにおいて、特別活動については学級活動〔学校給食に係るものを除く。〕に限る。）の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしなが、教育活動の充実を図るものとする。その際、児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、次に掲げることが偏りなく実現できるようにするものとする。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

これまでどおり、日本の教育において「生きる力」の育成を目指すことには変わらないが、その実現に向け、これまで以上に日本の将来を鮮明に描きながら、日本人として身に付けることを目指す資質や能力を教科、領域を超えて示している。当然ながら、体育科でも同様である。現行学習指導要領における体育科の指導内容は各領域に示された「技能」「態度」「思考・判断」であることを考えると、新学習指導要領で示された3つの資質や能力に近い構造であることがわかる。もちろん、同一ではないが、体育科は技能に偏らず、全人的

な教育を推進してきた教科であることを念頭においておきたい。

(2) 学校段階等間の接続

現行の学習指導要領でも、中学校・高等学校との接続については強調されており、12年間を見通して指導内容が体系化された。新学習指導要領では、実現が難しかった幼児期との接続が具体的に示されている。平成24年に文部科学省から幼児期運動指針が示され、幼児期から体を動かすことの重要性が述べられている。幼児期運動指針には、幼児期に運動が好きになり、身体活動が豊富だった幼児は幼児期の体力が高く、小学校への入学後もそれらが維持されることを調査結果から述べている。これを受けて幼稚園教育要領でも、体を動かした運動的な遊びがこれまで以上に明確に示されている。さらに幼稚園教育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことで、総則では「幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。」「低学年における教育全体において、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。」「小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう（中略）指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。」などが示されている。このことは、低学年の体育を運動遊びとして示している体育科にとっては、極めて重要な視点である。

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

授業改善のあり方としてアクティブ・ラーニングの視点を生かした「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」が示された。体育科におけるよい授業では、

このような授業が展開されてきたと認識しているが、決してすべての授業がそうであったわけではない。これからの世界における日本の立場を考えるならば、課題を見付け、その解決を図る課題解決能力が求められる。また、その学びが次の学びへの意欲につながることも重要である。これまでこうした学びを重視してきた体育科においても、あらためて体育科における学びの過程や結果を考えることは必要であろう。

さらに総則では「各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方（以下「見方・考え方」という。）が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。」と示されているとおり、体育科における「見方・考え方」について認識しておく必要がある。体育の見方・考え方については生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点で踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること。」（H28.12中教審答申）と整理されている。豊かなスポーツライフを目指すために各領域（運動）の特性や魅力が十分伝わる授業を展開することや、スポーツは「する」だけでなく、「みる・支える・知る」というかかわり（学び）もあり、自分がスポーツと様々なかかわり方ができることを実感できるような授業を創っていく必要がある。（4）個に応じた指導

どの児童も確実に指導内容を身に付けることができるよう個に応じた指導が一層重視されている。総則には「児童が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童の興味・関心等

に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。」と示されている。無論、体育科では、すべての児童に豊かなスポーツライフの基礎づくりをしようと考えれば、個に応じた指導は不可欠である。特にできる・できないがはっきりする体育科において、小学校段階で、誰もが自分の可能性を感じられるようにするには、個別に適した課題設定や手立てが必要である。

（5）カリキュラム・マネジメントの推進

小学校が特に教育活動において強みを発揮するためには、カリキュラム・マネジメントは欠かせない。総則では「各学校においては、校長の方針の下に、校務分掌に基づき教職員が適切に役割を分担しつつ、相互に連携しながら、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする。」と示されており、至極もつともなことであるが、体育の授業づくりの視点から述べたい。体育には教科書がないため、実施した授業のカリキュラムと教材を共有財産にしていけるとよいと考える。毎回の授業に悩む教員が多いのは、授業の拠り所がないことが大きな原因である。基になる情報があればそれをアレンジすることで自分の授業を構想することができるだろう。

2. 体育科はどう変わったのか

（1）目標について

各教科の改訂された内容を比較すると、体育科は最も変化が小さいように見える。しかし微修正されている言葉は意味づけされており、それを理解していくことが改訂の趣旨の理解につながるであろう。まずは、目標について確認しておきたい。

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

（1）その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。

(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。

(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

現行の小学校学習指導要領との違いは、学習過程について言及していることと、豊かなスポーツライフが一層強調されたことである。この2点は、大いに関連している。豊かなスポーツライフは、学校教育を終えた後、生涯にわたって自分に適した運動と末永く、よりよくつきあっていけるようにすることを目指している。社会へ出ると常に誰かに指導してもらえるわけではない。また年齢を重ねると心も体も変化する。生活スタイルも価値観も違う中で、自分に合った運動のしかたを模索していくが必要になる。そう考えると体育でも課題解決的な指導を推進することは必定である。体育科では現行学習指導要領でも、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で「児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。」と示されていたが、全教科を通じて強調されている。子ども主体の学習を推進すべきであるが、これは決して教師が指導しないのではなく、むしろそうした学習が深まるよう教師の支援が一層重要になることに留意すべきである。

(2) 指導内容について

育成を目指す3つの資質・能力が示されたことで、体育科においてもこれに準じて (1)知識及び技能 (2)思考力、判断力、表現力等 (3)学びに向かう力、人間性等で再編されている。ここで特筆すべきは、これまで思考・判断に含めていた知識を特出したことである。確かに「わかること」と「できること」との相関は高いといわれている。しかし、知識として高学年でも「行い方を理解する」ととどめていることから、子どもの学びに必要な情報を精選することが大切である。子どもが進んでよりよく学ぶための知識なので、教師の教え込みによる情報過多の状況は避けたい。

(3) 領域について

現行の学習指導要領のように新たな領域が追加されたといった大きな変化はないが、いくつか留意すべき点がある。1つ目は領域(内容)の名称

の変更である。体づくり運動では、低学年で「体づくりの運動遊び」と名称変更された。これは発達段階を考慮し、幼児期との接続から遊びの要素を取り入れた学習であることを明確にしたためである。高学年では、体力を高める運動から「体の動きを高める運動」に変わっている。これは中学年までの「多様な動きをつくる運動」との接続や体力向上の数値にとらわれすぎた授業が見受けられることへの対応であろう。水泳系では低学年からより実態に即した内容に修正されたことや、他領域との整合から、中学年では水泳運動と名称が変更された。また安全教育の視点も加味し、高学年では「安全確保につながる運動」が追加された。これまで多くの学校で行われていた着衣泳ともねらいは通じるところがあるが、着衣泳を必修にすることではない。ボール運動系でも現行学習指導要領下での実状や研究成果を踏まえ、より具体的に内容が示されている。

2つ目は、各領域のリード文に、これらを「身に付けることができるよう指導する」と示されている。つまり、課題解決的な学習をしたということではなく、きちんと身に付けること、解決することを強調しているのである。

3. まとめとして

ここまで、新学習指導要領での変更点を取り上げてきた。しかし、健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを目指すことをはじめ、子どもが運動の楽しさや喜びを享受できるようにしていくことには何ら変わりはない。小学校は6カ年と期間が長いだけでなく、変化の著しい時期の教育を受けもつ。まちがいなく、ここでの運動との関わりが豊かなスポーツライフに及ぼす影響は大きい。新しい学習指導要領で示された内容を十分理解するとともに、これまで培ってきた体育の指導法や理念を大切に、ますます体育の充実に邁進していただきたい。微力ながら筆者も何かしら貢献していきたいと日々願っている一人である。そして、今回の学習指導要領で示された育成すべき3つの資質や能力が体育のこれまでの3つの指導内容と類似していることは、体育科が教育の中で極めて重要な教科であることを示していることに他ならないと感じるものである。この自信と誇り、責任を今後の体育科の発展につなげたいものである。

Q 「主体的・対話的で深い学び」とは、具体的にはどのような学びなのでしょう。また、どのようなことがポイントとなるのでしょうか。

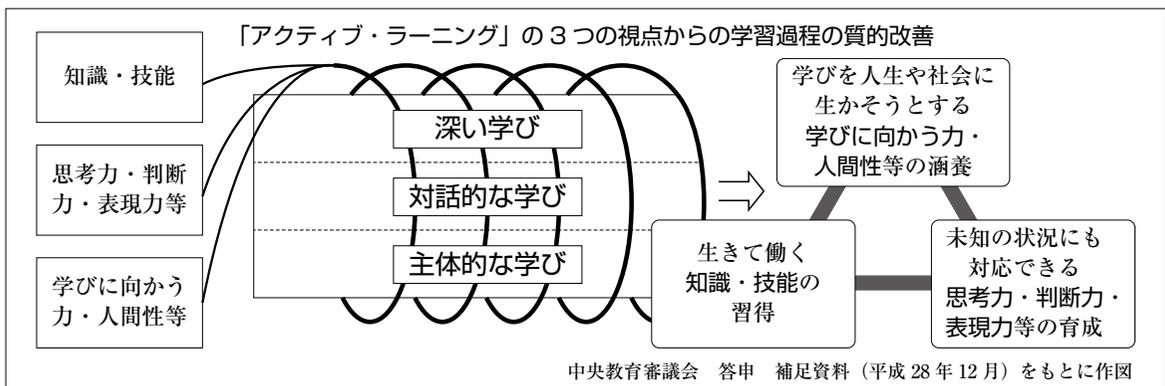
A 1年ほど前まではアクティブ・ラーニングといった指導方法が色濃く話題になっていましたが「主体的・対話的で深い学び」に変わってきました。これによって指導方法ではなく学びの質に重点が置かれました。12月の中央教育審議会答申でも「工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性のみ任せ、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている。」と危惧されているとおり、「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」の両面を明確にして授業することが重要になります。

この学びは課題解決的な学習により実現していくと考えられますが、その場合、「課題の持ち方」が重要です。課題を与えてグループでの解決を目指す学習を考えそうですが、与えられる課題ではなく、児童が見つかる課題を意識する必要があります。つまり子どもにとって「解決したい課題」であることが前提です。それを導くためには、授業の導入がひとつの勝負どころです。教材を提示し、そこから「楽しかったからもっと工夫したい、もっと上手になりたい、違うやり方を考えたい」などの意欲を高める中で「解決したい課題」を見つけられるようにしていくことです。解決したいのであれば、子どもたちが知恵を出し合い、結果として「対話的な学び」になり、試行錯誤しながら、結果や過程を振り返ることで「深い学び」につながりやすくなります。そして、解決できた

ことで次の意欲をもち「主体的な学び」になることでしょう。体育ではこれまでも「課題解決的な学習をすること」を目指していましたが、あくまで型にはまった指導方法ではなく、子どもの意欲を生かした学びをあらためて考え直すきっかけにすることが大切です。教師は見通しをもち、いかにタイムリーな支援をするかが鍵になります。

Q 「身に付けることができるよう指導する」とありますが、教師主導で技能を教える授業となるのでしょうか。

A これまでも、教師は児童が学習内容を身に付けられるように指導してきたはずですが。しかし、こうした文言があらためて学習指導要領に明記された理由は、おそらく、これまで学習内容の定着が十分ではない、または「主体的・対話的で深い学び」を目指す中で指導方法ばかりが先行し、学習内容の定着が不十分になることに懸念を抱いてのことでしょう。指導内容の合理的な定着だけを求めていくと教師主導が手取り早いかもしれませんが。しかし、ここで求められているのは技能ばかりではありません。思考・判断・表現などは、課題に向かって試行錯誤し、検証し、修正していくような学習が必要です。そうでなければ、対話的な学びの場面も生み出されません。そうすると教師主導で効率だけを求めているは身に付きません。かといって、子ども任せで右往左往しているだけでは、限られた時間の中で十分な学びはできません。教師がどこで、どのように子どもに支援（指導を含む）をすることで、子どもが意欲を保ち、自主的に学び合う中で結果的に「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びに向かう力、人間性」などが確実に身に付くようになるのかプランニングしていくことが求められます。



Q 体育では新たに「知識」が加わりました。どのような学習が想定できるでしょうか。また、留意点について教えてください。

A よりよい学びをしていくためには、学習のしかたがわかっていることが前提になります。ですから学習指導要領では「行い方を知り(理解し)」といった表現になっています。小学校の場合、体育の指導内容としては、これまで「知識」が表に出ておらず、「思考・判断」に含まれていました。そのため、現行学習指導要領では「知識」が明記されていなくても、学習指導要領解説の中では思考・判断の具体的な項目として「課題の解決の仕方を知り、自分の課題に応じた練習の場や段階を選ぶこと」(器械運動 高学年)のように「○○を知り」という形で知識が示されていました。「行い方」というのは、そこに含まれる内容が広く感じられます。これまでの経緯の中では「学習のしかたと基本的な運動のポイント」が中心の内容になることでしょう。体育でも知識が重要なことはいまでもありません。技能を身に付けるうえでは動きのポイントを知ることが合理的な練習につながりますし、協力するにも準備の分担のしかたを知るとか、友達の動きの何を見るのかを知ることができていなければ協力のよさにも気づけないでしょう。もちろん、思考・判断するには前提となるセオリーや基本的な情報が必要です。作戦も原則的な攻め方がわからないと理にかなったものにならないでしょう。

しかし、知識の扱いには注意が必要です。多くの教科では量的に知識が多いと評価が高くなりますが、あくまで体育の場合、たくさん知っていることがよいのではなく、課題解決に向けて活用するために必要な知識であることが大切です。課題を解決したい、そのためにこの知識がほしい、このことを知ったから、それを活用してこんな作戦を立てるといった具合です。つまり生きて働く知識を意識して授業を構想する必要があります。

Q 思考・判断に加えて「表現」が加わりましたが、これまでとどんなところが変わのでしょうか。

A 新学習指導要領の「表現」は、主に言語活動との関係で述べられています。現行の学習指導要領から言語活動を重視するようになりました。言語はコミュニケーションに必要な手段で

あることはいまでもありませんが、物事を思考するうえでも重要です。なぜならば、ものを考えるときに頭の中では言葉で考えているからです。そのために、言語に関する能力を育成する必要があります。その育成には「日々の教育活動の中で、言語活動を充実する必要がある」という論理です。ですから、体育でもそうした言語活動を重視することは大切です。ただし、気をつけなければならないのは、量よりも質を大切にすることです。体育は運動を通して学ぶ教科ですから、話し合いなどの時間の確保を重視するあまり、運動学習場面がぐっと減ってしまうようでは本末転倒です。例えばグループで話し合う場合、その課題が具体的になっていることや話し合うための情報が提供されていることなどがポイントです。

また、体育における表現は、特徴的な面があります。現行学習指導要領では、各領域の指導内容でも、評価規準でも思考・判断と表されています。なぜ、表現を割愛していたのかというと、1つには表現運動領域があり、紛らわしいこともあるのですが、もう1つ、大きな理由として、「体育では、課題に対して思考し、判断した結果、表現されるのは練習方法や運動の場、ルールや作戦(動き方)なども含まれる」からです。先にも述べたとおり、言語による表現は重要ですが、それだけではないことも念頭に置いて指導すべきでしょう。

Q 「個に応じた指導」とありますが、具体的にどのように行えばよいのでしょうか。

A 体育が目指すキーワードとして「豊かなスポーツライフ」があります。これは、決して優秀なスポーツ選手を育成することではなく、すべての人(性別や年齢、障害の有無を問わず)が自分に合った運動とのかかわり方を見つけ、生涯にわたって継続できるようにしていくことです。そのためには、小学校のうちに誰もが運動の楽しさを知る、自分でもできそうな有能感を感じられるなど、授業づくりで押さえるべき大切な要素があります。個人の技能差が見えやすい体育において、どの子どもも楽しさや有能感を感じるためには、個に応じた課題をもち、個に応じた学習方法を選択できる学習が不可欠です。小学校学習指導要領総則には「児童が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童や学校の実態に応じ、

個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補足的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。」と示されています。現行学習指導要領でも体育においては「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」で下のように個に応じた指導について示しています。

地域や学校の実態を考慮するとともに、個々の児童の運動経験や技能の程度などに応じた指導や児童自らが運動の課題の解決を目指す活動を行えるよう工夫すること。

ですから、体育においてはこれまでも個に応じた指導について、大切に扱ってきました。具体的には、課題を具体化して自分に合った課題がもてるようにする、スモールステップで少しでもできた喜びを味わえるようにする、よりやさしい教材から取り組むなどの手立てが考えられるでしょう。そうした積み上げが豊かなスポーツライフの基礎を培うには重要です。

Q 「ICTの活用」の推進が盛り込まれていますが、体育で使うと運動量がぐっと少なくなってしまうのではないのでしょうか。

A 小学校学習指導要領総則には、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成として「各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。」と示されています。体育においてもタブレットなどのICT機器を活用することで、一瞬に過ぎ去ってしまう友達の動きを繰り返し見ることができたり、自分の動きをスローで観察することができたりします。そのことで、それまで気づけなかった課題を発見することもできるでしょう。有効な活用が期待されます。一方で、活用のしかたに一定のルールをもたないと、タブレットを活用する時間が肥大化し、その分、運動学習場面が削られてしまうという現実があります。限られた時間の中でタブレット等を有効に活用するためには、5W1Hを明確にしてお

くことが重要です。なぜ（何のために）、いつ、誰が、どこで、何を、どのように撮影し、活用するのかをルールにしておきます。これにより、合理的な活用が可能になります。

Q 学校段階等間の接続が一層、強調されていますが、留意すべき点を教えてください。

A 小学校は6年間という長い期間を過ごしますが、それだけ重要度は高いといえますが、その間の成長が著しいため、まるで、その中で教育が完結しているように見えがちです。より確実な成長を図るには、その前後、つまり幼児期と中学校との接続を考慮する必要があります。幼児期は遊びを通した総合的な学びをして成長してきます。その結果として新幼稚園教育要領では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されました。幼児教育での学びをしっかりと小学校教育にバトンタッチするためです。小学校低学年では、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、体育科での学習に円滑に接続されるよう指導の工夫や指導計画の作成を行うことが求められます。

例えば、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中で体育とのつながりが深いと考えられる「健康な心と体」では「幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。」と記載されています。自己決定した運動的な遊びに十分浸りながら楽しさや有能感を感じ、心や体（動き）を育んできた子どもたちを小学校でより充実した学びに引き継いでいくわけです。具体的に低学年の体ほぐしの運動は新たに体ほぐしの運動遊びとなりました。元々体ほぐしの運動には、体育でいう遊びの要素は含まれていたのですが、運動遊びの趣旨を一層明確にしたものと捉えることができます。これは幼児期との接続の一例です。

中学校との接続は、現行学習指導要領のとおりです。小学校から高等学校まで12年間を見通し、4年ごとのまとまりで構成されていますので、高学年では中学校の内容をおよそ確認しておくことで、限られた時間の中で中学校への円滑な接続を図れる可能性が高まります。新学習指導要領では中学校との接続においても、内容の改善が図られています。（しらはた・かずや：スポーツ教育学）

児童が「できた！」と感じる 学習活動の工夫

—「デジ体」を活用した授業づくり—

東京都中央区立佃島小学校教諭 小林 悠里子

はじめに

本校では、平成28年度から「児童が運動の楽しさを味わえる指導の工夫」という研究主題のもと、体育の研究を行っている。研究主題に迫る手立てとして、児童に充実感や達成感を味わわせるためにタブレット端末の活用を行った。本校ではこれまでタブレット端末を活用した実践例はなく、平成28年度が初めての実践である。

1. 運動の特性

(1) 一般的特性

- マット運動は、前転系、後転系、倒立回転系、倒立、バランスなどの技に取り組み、できるようになる楽しさや、技のできばえを楽しむことができる運動である。
- マット運動での倒立やいろいろな回転運動は、歩・走・跳・押・引などの日常運動からかけ離れた非有用性の運動である。しかし、この運動は日常生活で経験できない複雑な姿勢の変化やそれに伴う多様な運動感覚を体験することで、楽しさを味わうことができる運動である。

(2) 児童から見た特性

- 「できる」「できない」がはっきりしているので、マット運動は苦手、あるいは嫌いとしている児童が4割ほどいる。
- 「できる」技をつなげることで、新しく「できた」喜びをもたせることができる運動である。

2. 児童の実態

授業前の実態調査としてアンケートを行った。アンケートの結果として、マット運動が楽しいと感じるときでは、「できない技ができるようになったとき」と答えた児童が6割以上いた。次に「きれいに技ができたとき」と答えた児童が多かった。

マット運動が楽しくないと感じるときについては、「技ができないとき」「練習してもなかなかうまくいかないとき」と答えた児童が多かった。

このことから、技能の向上を実感できることがマット運動の満足度につながるということがわかった。

また、①様々な動きに取り組む／②十分に運動の時間を確保する／③できたことを実感する、の3つが運動の楽しさにつながっていると考えられ、本単元の授業の中で上記の3点を意識して行う必要があると考えた。③のできたことを実感できる学習活動の工夫としてタブレット端末を活用した。

なお、児童はタブレット端末を使った学習は初めてなので、マット運動の学習に入る前にタブレット端末の使い方を説明した。

3. デジタル教材—「デジ体」を使うねらい

本単元では小集団での学び合いを行っている。タブレット端末を小集団内で活用することにより、自分の動きを見ながら友達のアドバイスを聞くことができ、課題解決へのイメージがもちやすい。また、はじめと終わりの自分の動きを比較させることで自分の伸びを実感させることができる。

4. 単元計画 (資料1参照)

5. 授業実践

(1) 授業

- ①少人数での学習を行うために、3～4人のグループを編成し、全部で8グループとした。教え合い・学び合いができるよう、マット運動を得意としている児童をリーダーにし、異なったレベル(異質グループ)になるようにした。
- ②2時間目から「デジ体」を使った学習を行った。児童によっては友達を追って撮影してしまうため、撮影する場所を指定した。マット全体と技



【写真1】補助具を使った練習



【写真2】手と足をつくりズムを大切に、側方倒立回転

【資料1】単元計画

時	1	2	3	4	5	6	7
	知る	取り組む（共通学習）			高める		
学習活動	【オリエンテーション】 ①集合、あいさつ ②学習の進め方の確認 ③学習資料の使い方 ④準備運動 ⑤場の準備 ⑥学習する技を知り、試してみる。 ⑦学習の進め方の見通しやめあてをもつ。	①集合、あいさつ ②準備運動 ③場の準備をする 【エンジョイタイム】 ○ポイントをかめながら「基本技」に取り組む。 ○下の基本技から2種目選択し、練習する。 <基本技> …前転・開脚前転・後転・開脚後転・側方倒立回転・壁倒立・ブリッジ・腕立て横とびこし					○発表会に向けて練習する。
		【スキルアップタイム】 ○自己の課題に合った練習の場を選択し、取り組む。 ○小集団で見合い、教え合いながら学習する。（「デジ体」を使った学習）					◆発表会をしよう。 ○発表会
		◆前転、後転、開脚前転、開脚後転の技のポイントを知り練習しよう。	◆腕立て横とびこし、側方倒立回転の技のポイントを知り、練習しよう。 ○4時間目の後半に、組み合わせ技に入れたい技を考えよう。	◆流れを意識して組み合わせ技に挑戦しよう。	◆組み合わせ技に入れたい技をみがこう。		
	①整理運動 ②学習の振り返り ③整列・あいさつ ④場の片づけ						
教師の支援	T1	【1時】 ・単元全体の活動の見通しをもたせる。 ・技調べを通して、自己の今の力と、自分に合った取り組み技を理解させる。 ・安全な場や用具の使い方を指導する。 【2～7時】 ・技のポイントや技能を高めるために、示範や運動分析図の掲示を工夫する。 ・どのような視点で友達と技のできばえを見合っていけばよいかを考えるように助言する。 ・活動の安全を管理する。 ・個人のがんばりやグループでの教え合いのよかった点を全体に紹介する。					
	T2	【1時】 ・支援が必要な児童に手助けや助言をする。 【2～7時】 ・支援が必要な児童に手助けや助言をする。					
評価規準	◇態-①	◇技-① ◇思・判-①	◇技-① ◇思・判-①	◇技-① ◇思・判-①	◇技-② ◇態-②	◇技-② ◇思・判-②	◇技-② ◇態-②



【写真3】「デジ体」の撮影機能を使って撮影



【写真4・5】撮影した映像を見て課題把握と教え合い



【資料2】小グループでの学習の流れ

<p>【前半グループ】</p> <p>撮影-①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題把握 <p>↓</p> <p>練習-①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補助具を使って練習し、教え合いを行う。 <p>↓</p> <p>撮影-②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・撮影-①と比べて、自分のでき具合や新たな課題に気づく。 <p>↓</p> <p>練習-②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見つけた課題を改善するための練習をする。 	<p>【後半グループ】</p> <p>練習-①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補助具を使って練習し、教え合いを行う。 <p>↓</p> <p>撮影-①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題把握 <p>↓</p> <p>練習-②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・補助具を使って練習し、教え合いを行う。 <p>↓</p> <p>撮影-②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・撮影-①と比べて、自分のでき具合を確認し、次時への課題をもつ。
---	--

が見える位置を撮影場所にすることで技の確認などを効果的に行うことができた。

③本単元では、タブレット端末4台を使用した。8グループすべてが使えるようにするため、資料2に示すように「撮影(タブレット使用)→練習→撮影→練習」パターンの前半グループと、「練習→撮影(タブレット使用)→練習→撮影」パターンの後半グループに分けて使用するように工夫した。

授業を通して、前半グループのように「課題把握→練習・教え合い→確認」の学習の流れが児童にとっては効果的であった。また、4台だと使える時間にも限りがあるため、各グループ1台用意し、いつでも使える環境づくりが大切であると感じた。

2時間目から6時間目について、資料1(P.11)に示すように「エンジョイタイム」という、5分間、自分が取り組みたい技の練習を行う時間をとった。さらに「スキルアップタイム」では本時のめあてに沿った学習を行った。基本的にスキルアップタイムでは「デジ体」の撮影機能を用いて撮影・確認をし、練習を行った。練習では各グループに単

技を向上させるための補助具をかごの中に用意し、技に合わせて練習が行えるようにした。

また、単元の後半5時間目には「流れを意識して組み合わせ技に挑戦しよう」というめあてで授業を行った。

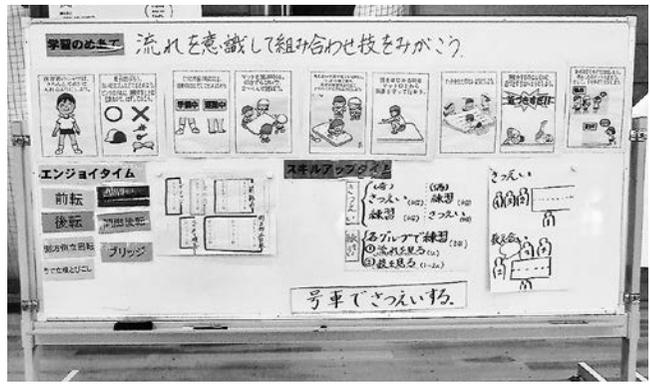
それまでは単技の学習だったが、組み合わせ技ということで、1人の児童が技を終えるまでに時間がかかってしまい、「デジ体」を用いて話し合う時間の確保ができなかった。また、組み合わせの流れを撮影したものの単技のみに注目してしまい、流れを意識して映像を見る児童が少なかった。見る視点を明確にする必要があった。

(2) 児童の変容

最初は友達のアドバイスがなかなか具体的にイメージできなかつたり、自分の課題を見つけることができなかつたりする児童が多かった。「デジ体」を活用することで、アドバイスの言葉がより具体的になり、教え合いの活動が充実したものになった。また、スロー再生ができるので自分の動きをより詳細に観察することができ、課題を意識しながら練習に取り組む児童が増えた。



【写真6】 ノートやカードに学習感想を書く



【写真7】 第5時で使用したホワイトボード

【資料3】 「デジ体」を活用した児童のめあてと感想

- ◆めあて……手・手・足・足のリズムを意識して、側方倒立回転をする。
- ◆学習感想…手・手・足・足のリズムで回転することができた。
 友達から手と手の間を見るとよいと教えてもらって、やってみるとはじめのときよりもまっすぐ回ることができた。次は、後ろ足をまっすぐ伸ばして回れるようにしたい。

【資料4】 「デジ体」に関する児童の感想

- 苦手なところを自分ですぐ見てわかることができた。
- 繰り返し自分の動きを見ることができてよかった。
- スロー再生ができるので、側転などの動きの速い技も細かく確認できた。
- 「デジ体」の技の見本を見て参考にすることができてよかった。
- 映像を見ながら友達に教えてもらえて、練習しやすかった。
- 側転の足の上がり方を確認することができて、側転が上達した。

また、これまでは、めあてや学習の感想を抽象的にしか書けなかった児童が多かった。しかし「デジ体」で動きを見返すことで、友達のよい動きや自分の課題を学習カードに具体的に書くことができるようになってきた。

さらに、最初は側方倒立回転が苦手な児童が多かったが、資料4の感想にもあるように、スロー再生で手や足の位置を見ることで、まっすぐ足を伸ばして回転することができる児童が多くなった。

6. 成果と課題

(1) 成果

- 「デジ体」を活用して自分の動きを確認することで、課題を見つけることができ、技能が向上した。また、意欲的に練習する児童が増えた。
- 映像を見ることで、具体的な言葉でアドバイスをすることができ、教え合いが深まった。
- 「デジ体」を用いることで、授業時間ごとの動きを振り返ることができ、単元を通して、自分の技能の伸びに気づくことができた。
- 補助具をグループごとに用意することで、子どもたちは課題に応じて道具を選択し、練習に取

り組むことができた。

(2) 課題

- タブレット端末を使ってグループで振り返る時間が少なかったため、アドバイスの時間を十分に確保することができなかった。十分な振り返り時間をとり、子どもたちが伝え合う時間を確保する必要がある。また再度技に取り組んで、振り返る時間の確保も必要である。活動内容を精選する必要がある。

おわりに

タブレット端末を活用した授業は初めてだったが、児童は意欲的に取り組んでいた。体育の学習では、自分がどのような様子で運動しているかをイメージすることが大切である。自分のイメージどおりに動いているかを確かめる手立てとして「デジ体」はとても有効であった。

以前からある体育学習の手立てとともに「デジ体」を活用することで、児童が「運動が楽しい」「できた」と感じられる授業づくりが可能になると感じた。
 (こばやし・ゆりこ)

「わかる・できる・かかわる」を保障する てのひらテニスの実践

—小学校高学年を対象に—

埼玉県川越市立今成小学校教諭 田中 正徳

はじめに

今回の実践は、「テニス」をもとにしたゲームが小学校段階で可能かどうか、また、その実践で子どもたちの行動と意識の面でどのような成果を得ることができるのかを確かめたいという思いから生まれたものです。筆者が平成28年度埼玉県長期研修生として、1年間の研修期間を得られたことを機に計画・実践しました。試行錯誤を重ねながら取り組みを行い、結論として、本教材が児童・教師にとってわかりやすいゲームを実現し、確かな体育的学力の保障に貢献するということを確認することができました。本稿では、この「てのひらテニス」の授業の考え方と進め方の一端をご紹介します。

1. 研究の背景

ネット型（ソフトバレーボール、プレルボール等）の授業において、楽しさや魅力でもあり、課題となるのは「ラリーの続くゲームをする」ことであると考えます。昨年度、県内外の学校における授業参観や、川越市内の小・中学校教員を対象とした調査結果から、そのことがより明らかとなりました。一方で、ラリーを続けられるようになるまでの指導の困難さについても、同時に指摘がなされました。では、なぜラリーを続けることが難しいのでしょうか。私は次の3点が大きな課題であると考えました。

1つ目は、ボールの操作（サーブやレシーブなど）が思うようにできないということです。一般の先生方が行う日常の体育授業では、ボールの扱いになかなか慣れない、慣れ始めたころに単元が終了してしまうといった現状があるのではないかと思います。この課題を改善しようとして「ボール操作の指導」中心の授業になってしまうことも多いのではないのでしょうか。

2つ目に、ボール操作にたどりつくまでの動きがわからない。また、ボールの軌道がわからなかったり、ポジションがとれなかったりして、ボールの方向に動けないことがあげられます。「ボールの扱いは少し上達したけれど、実際にゲームをしてみたら全然うまくいかなかった」という感想を、私も児童から受けたことがあります。

3つ目に、自分が何をしたらよいかわからない、ゲームが複雑すぎて理解できず、結果つまらない、動きたくないなどの理由も、残念ながらこれまでの経験や専門書を読むなかで知ったり、感じたりしてきました。

2. 授業の構想

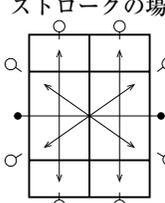
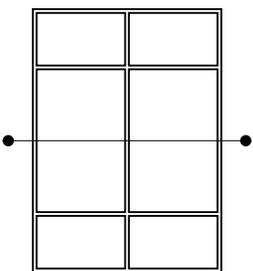
では、それらの課題を解決したり、子どもたちを運動に誘い込んでより夢中にさせたりするためには、どのような授業が求められるのでしょうか。

私は小学校段階において、「攻守一体型」（チーム内につながらないで返球するゲーム）の教材を経験させることに意義があるのではないかと考えました。「てのひらテニス」は、今井（2013）、村中田（2015）等による実践をアレンジした教材です。この教材に私は次のような魅力・可能性があると考えました。

- ① 1人ひとりの運動機会を保障し、すべての児童が活躍できる可能性がある。
- ② ネット型のゲーム全般につながる「動きづくり」が身につく。
- ③ ゲームが単純で役割も明確なので、児童相互のかかわりをもたせやすく、指導がしやすい。
- ④ ゲームがシンプルのため、身につけさせたい力のゴールをイメージしやすく、教師の指導と評価の一体化を図ることができる。

さらに上記の内容は、それぞれが個別のものではなく、相互に関連していることがわかります。

[表1] 単元計画（6年生・てのひらテニス：10時間）と教材教具

第1時～第4時	第5時～第7時	第8時～第10時
<p>【打つことに慣れ、ラリーをつなぐ楽しさを味わわせる時間】 (主な感覚づくりと基本練習)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールリフティング ・壁打ち ・思いやりストローク </div> <p>【主なゲーム】 ・つなぎっこゲーム</p>	<p>【ゲームの特徴を知り、いろいろな攻め方を試す時間】</p> <p style="text-align: center;">ストロークの場</p>  <p>【主なゲーム】 ・攻め方を試すゲーム ・てのひらテニス</p>	<p>【自分たちの得意な攻め方でゲームの攻防を楽しむ時間】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チーム作戦と練習タイム ・ゲーム1 ・チーム作戦と練習タイム ・ゲーム2
<p>【人数】 ・対戦は2対2 ・4人1チームで、出ていないペアは得点や記録をする。</p>	<p>【ボール】 ・ミニテニス協会公認球 ・直径約12～15cm、重さ約30gのビニール製のボール ・1.5mの高さから落として60～70cm弾む。</p>	<p>【コート】 ・縦9m×横6.5m (バドミントンコートを少し狭くした大きさ) ・ネットの高さ100cm</p>
<p>【ラケット】 ・横25cm×縦30cmの2枚の段ボールを袋状に貼り合わせた中に手を入れて使用する。</p> 		
<p>【てのひらテニスの主なルール】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サーブは下から打つ。 ・サーブはどの場所から打ってもよいが、相手コートの中央付近（相手が打ちやすい場所）へ打ち入れる。 ・サーブはペアで交互に1回ずつ打つ。 ・3分間×2ペアの試合で、得点数の多いチームの勝ち。 		

3. 授業実践（第6学年，表1参照）

(1) 単元計画とルール，教材教具

単元計画を考える際に大切にすることは、学習を終えたとき「どんな児童の姿をイメージするのか」ということです。児童にとって楽しい教材であり、教師の指導の結果、身につけさせたい力が明確になっていることが体育を学習するうえでも重要だと考えました。

「てのひらテニス」の授業で私がイメージしたのは、まずはラリーが続くこと、そして最終的に、ある程度ねらったところにボールを打つことができ、攻防の楽しさを味わうことができることで

した。そしてこれを単元のゴールに据えました。またそれを達成するために、「必要な打ち方のコツを見つけ、それをゲームの攻め方につなげること」「ペアやグループとのかかわりを通して、考えたり動いたりすること」を大切に、それらを導く主なゲームとして「つなぎっこゲーム」と「てのひらテニス」を位置づけました。

表1の単元計画に示したように、前半でつなぐ楽しさを体験させ、後半では攻防の楽しさを味わわせたいと考えました。次のページで、具体的な児童の反応と指導で留意した点について述べます。

【写真1】 コートのバックライン上とその1mほど後方の2か所にテープを貼って、戻り位置のめやすに。



【写真2】 段ボール製のラケット



【写真3】 ペアで息を合わせて！



(2) 授業の流れと児童の反応

◆第1時～第4時(単元前半)

単元前半では打つことに慣れるために、「ボールリフティング」(基礎感覚づくり)を行うことにしました。ボールリフティングが正確にできるようになると、ラケットでボールを操作することも容易になっていきます。いつもはそれほど目立たない児童も、実際にやってみると上手なこともあり、ほめるチャンスがたくさん生まれました。

次に「思いやりストローク」です。ここでは、4ペアが同時に打てるように、表1の図にあるような場で行いました。相手の打ちやすい位置に返さなければお互いに上手になりませんし、つながらなければ楽しくありません。ですから、相手のことも考えながら行うという意味でこの名前をつけました。最初の1・2時間目は打つ方向が定まらず、ラリーが続かないことがありましたが、「つなぎっこゲーム」では、チーム内でつなぐことを意識して取り組むことができたため、ラリーが50回以上続いたチームも出てきました。「楽しい」「相手の打ちやすい位置へ返すと続く」「ふんわりとしたボールを打つ」など、肯定的な感想や打ち方のコツが学習カードに記されていました。

◆第5時～第7時(単元中盤)

「打つこと」に慣れてきた単元中盤では、「より動いて打つこと」が課題となります。なぜなら、「つなぎっこゲーム」では相手の打ちやすい場所(相手の少し手前)に返球することが課題でしたが、「てのひらテニス」では、「相手を動かすこと」「動いて打つこと」が課題になります。ゲーム当初、主なルールのみを伝え、特に「相手を動かして」といった指導はあえて行いませんでした。児童の学びを引き出すためです。第5時では、ゲームを行うなかで、児童は「相手を動かせば得点しやすい」と「自分が動かなければ打てない」ことを学んでいきました。そのなかで、次のような課題が生まれます。「早く元の場所に戻らなければ、次のボールに対応できない」。ここで教師は、戻

る動きが上手な児童(ペア)を取り上げ、ボールを持たないときの動きについても視点をもたせるようにしました。第6時では、気づきだけでは下位の児童はなかなか実行できなかったもので、コートのバックライン上とその1mほど後方にテープを貼り(写真1)、「位置について」「よいい」を合言葉にして、戻る動きと構える動きが強調されるよう指導を工夫しました。授業後の分析では、「元の位置に戻る動き」に顕著な向上がみられました。単元後半は、ほぼ100%の児童が習得できていたことから、この工夫は児童が考えながら「ネット型に必要な動きを身につける」のに有効な手立てであることが確かめられました。

このような流れで指導と評価を行うと、6時間目の段階で、「ある程度ねらって打てる」児童が7割ほどになりました。これは5年生でも同様の結果が得られたので、中学年でも6時間から7時間で「ある程度ねらって打てる」段階までは達成できるのではないかと手応えを感じています。ゲームでラリーを続けることができるようになると、児童のやる気がぐんぐん上がってきました。また、「つなぎっこゲームと反対のことをすればいいんだ」という感想もあり、単純な動きと役割、ルールが児童にマッチしていることが示唆されました。

単元中盤のゲームで取り上げた主な攻め方は、「相手のいない左右をねらう」「つなぐときと攻めるときでボールの速さを変える」「コートの奥に打つ」というものでした。

◆第8時～第10時(単元後半)

単元後半では、中盤で経験した攻め方をもとに、作戦ボードと作戦分析カードを用いてゲームをより深めていきました。

大人もそうですが、攻め方をひとつお試してみても初めて、自分に合った作戦がわかってきます。攻め方の「習得」から「活用」ひいては「探究」までを教師がある程度予想して指導内容を絞り、求めた基準に対して評価することで、主体的な学

び、自発的な運動の楽しさが生まれるのではないのでしょうか。そのため、単元後半ではゲーム中心の授業を行いながらも、「いちばん得点しやすい場所はどこだろう」といった発問の工夫によるはたらきかけを行いました。児童は経験から得た知識（知恵）から、「コートの右側」「打って抜けた相手をねらう」などの考えを導き出していました。そうすると他のチームもよい作戦をまねし始めるので、次の課題が生まれてきます。それは、どちらが先にバック側を攻めるか、相手の打ちにくい場所に打てるかというテニス本来の特性に迫った課題です。あるチームは「どこに打たれてもつなぎます」と言っていました。私はなるほどと思いました。ラケットの操作が完璧でなくても、すばやく動いて相手よりも長くつなげば、得点につながる可能性があるからです（ナダル選手のようなスタイル）。一方、前後左右と相手の裏をかくペアもありました（錦織選手のようなスタイル）。そのペアに「打つ前に相手が見えているのかな」と質問すると、「見ながら打っています」と言います。全体にも相手の動きを予測して打っているかと質問したところ、半分くらいの児童が手をあげました。このことから、ラケット操作（てのひらの感覚）が十分養われ、そのことに気を取られることなくプレーできていることが示唆されました。

（3）単元後の児童の感想

- ・最初は遊びぐらいに思っていたけど、今では左右にボールを出したり、速い球を出したりして、工夫しています。
- ・ぼくは1時間目より確かに強くなりました。そして、他の人も強くなったので、とてもいい試合がたくさんできました。
- ・作戦を自分たちで考え、試合で試すことができました。成功してとてもうれしかったです。
- ・かけ声をかけて励ましたり盛り上げたりして、チームで取り組むことができました。

4. 結果（抽出児童8人）

表2から、全時間を通して「児童が構える・ボールを追いかける・相手に打ち返す」が習得できていたことがわかります。スペースをねらったラリーにもかかわらず、10回以上ラリーが続くペアもみられました。また、レシーブの返球成功率は単元後半では9割を超す結果がみられ、単発で終わらないゲームが展開されていたといえます。

〔表2〕全10時間の技能分析結果

	試技回数 合計	成功数	成功率
相手コートへの返球 (サーブも含む)	734回	604回	82.3%
バウンド位置に移動する	640回	581回	90.8%
元の位置に戻る	700回	598回	85.4%

5. 実践して感じた成果と今後の課題

以上、小学生を対象とした「テニス」教材の実践とその成果を報告しました。本実践を通して、「1人ひとりの動きの素地をつくり、ラリーを続けられるようにする」というネット型の課題を解決し、「小学校におけるテニス」の可能性の一端を明らかにできたのではないかと感じています。しかし攻守一体型の研究は小学校においてはまだまだ研究の余地があります。例えば、「交代で打たないで本来のダブルスのようなルールで行うゲーム」「中学校における本教材の有効性の検証」等です。本実践を参観いただいた埼玉県内外のたくさんの先生方から、その可能性や汎用性にふれたご意見をいただきました。それらをこれから検証していくことが次の課題です。

おわりに

私は運動が大好きです。子どものころは嫌いでした。でも今は大好きです。

どんな時代になろうとも、子どもが夢中で運動し、楽しみながらわかってできる授業をしようと考えるならば、教師がするべきことは自ずとみえてくるのだらうと思います。

子どもの笑顔を守るのは教師の仕事です。そのことを忘れず、自分自身も笑顔で楽しみながら運動を継続し、その楽しさを全身（心）で伝えられる教師であり続けたいと思っています。

（たなか・まさのり）

〔参考文献〕

- ・今井茂樹（2013）「小学校に攻守一体タイプのネット型ゲームを」『体育科教育：2013年5月号』（大修館書店）：p.28-32.
- ・村中田博（2015）「ボール操作の基礎感覚を耕す授業づくり」『体育科教育：2015年9月号』（同上）（10）：p.30-34.



授業者：東京都杉並区立馬橋小学校教諭 齊藤 慎一
講評者：東京学芸大学教育学部准教授 鈴木 聡
参観者：東京学芸大学鈴木聡研究室ゼミ生



Live Lessonsは、ビデオ通話ツールを使って、体育の授業をリアルタイムで参観し、講評・議論するコーナーです。今回は光文書院が用意したiPadとWi-Fiルーターで馬橋小学校の授業を撮影し、鈴木聡研究室に講評をお願いしました。

■単元と本時の概要

○単元名 走・跳の運動領域「10秒間走」

○単元の目標

【関心】グループの友達を応援し、励まし、アドバイスすることができる。

【思考】ポイントをもとに自分なりのコツを考えることができる。

【技能】低い姿勢、強い蹴り出しのスタートができる。

○児童の実態（3年生）

クラス替えしたばかりで、深い友達関係はまだできていない。友達に遠慮し、言いたいことが言えない子ども、自分の欲求を優先させてしまう子どもなどが混在している。自分から友達へと視線を広げ、その中で互いのよさを認め合える雰囲気づくりをすることが喫緊の課題である。

○本時のねらい

①達成感（運動有能感）を得る

「練習すれば自分だってできるようになる」と子どもたちが感じられるようにする。ポイントを絞ったアドバイスを行わせ、単元前後の記録を比較させる。

②友達関係の構築

「友達と一緒に運動すると楽しい」「友達と協力すると気持ちがいい」と感じられるようにする。「みんなでできる」をテーマとし、毎時間の初めに確認する。

③教師の理想とするクラスの具現化

・思いやりのあふれるクラスにしたい→友達への励ましの言葉、応援、アドバイス

・「あきらめずに努力する→やれば可以的」という成功体験の積み重ね。できるようになるためには教師、友達の話をしっかり聞く必要があることに気づかせる。

○単元計画（全5時間）

時	1	2	3	4	5	
学習内容	【オリエンテーション】 ・10秒間走の行い方 ・目標、理想とする姿を具体的に伝える ・自分の最初のスタート位置を知る	① 整列、挨拶、準備運動		② 基礎感覚づくり（リズム感覚、跳感覚、平衡感覚）：ぐねぐねリレー		
		③ スタート時のポイント ・腰を低くする ・強く蹴り出す	③ 中間走のポイント ・ピッチコントロール ・腕を素早く振る	③ これまで出されたポイントの確認		③ 50m走を計測する 今までの記録との比較を行い、友達のアドバイスでできるようになることを実感させる
		④ ポイントを考えて取り組む：10秒間走			⑤ 振り返り a)友達のよかったところ b)友達からのアドバイスについて	
		⑤ 振り返り a)スタート時の姿勢について b)友達のよかったところ	⑤ 振り返り a)腕の振り方について b)友達のよかったところ	⑤ 振り返り a)友達のよかったところ b)友達からのアドバイスについて		
重点評価	【関心】 グループの友達と走る順番や役割分担を自分から話している（観察）	【思考】 スタート時のポイントを考えている（発言）	【思考】 中間走のポイントを考えている（発言）	【思考】 アドバイスの内容がポイントをふまえている（観察） 【関心】 友達にアドバイスをすることができる（観察）	【技能】 低い姿勢、強い蹴り出しのスタートができる（ビデオ） 【思考】 それぞれのポイントを考えている（体育ノート）	

○本時の展開（4/5時）

時	主な学習活動	○留意点 ◇支援 ☆評価
導入	1. 整列、挨拶 2. 準備運動 3. ぐねぐねリレー（基礎感覚づくり） ・直線：腕を素早く振って加速 ・大きなスラローム：体を斜めにしてバランスをとる ・小さなスラローム：細かいステップを踏む ※競争はあくまでも手段として利用する。大切なのはそれぞれの場に応じて丁寧に走ることだと意識させたい。	○服装の確認と集団行動の確認。 ○1つ1つの動きのポイントを伝える。 ○最初にそれぞれのポイントを確認する。 ◇2チームが別々のスタート位置から行うことで、最後まで差が見えづらい状況をつくる。 ○チームの友達の応援や励ましの言葉をしている児童を称賛し、全体に広げる。
展開	4. 10秒間走に取り組む 【役割分担】 1回ごとにローテーションする。 ①走る人：10秒以内で走れるスタート位置から全力で走る。 ②スタートから12mまでを見る人：スタート時の腰の高さと強い蹴り出しを見てアドバイスする。 ③中間走を見る人：腕の振り方と腿が上がっているかを見てアドバイスする。 ④ゴールの判定をする人：10秒以内に走りきれたかどうかを判断する。 ※走り終わったら全員がゴール地点へ集まり、1人ずつ上記の中から自分で選んだアドバイスを行う。	○これまでみんなで共有してきたポイントを確認すると同時に、見るポイントを1つに絞ってアドバイスするように伝える。 ○アドバイスするときにはグループ全員が集まり、1人ずつ話をさせる。 ◇話し合いがうまくいかないグループに教師が介入し、意見を引き出す。 ☆【思考】 アドバイスの内容がポイントをふまえている（観察）／【関心】 友達にアドバイスをすることができる（観察）
まとめ	5. 整理運動を行う 6. 振り返りを行う ①友達のよかったところ ②友達からももらったアドバイス	○本時のめあてに対する振り返りを行う。 ○よかった児童を積極的に称賛し、全体に広げていく。

鈴木 全員、指導案は読んでいますね。どんな視点で授業を見るのか、あらかじめ決めておくように。ただ、先生が子どもにどんな声掛けをしているか、そして子どもがどんな反応をするのかは、しっかりと注目するように。

授業を見ながら

■導入

(1) 整列、挨拶、準備運動

鈴木 準備運動前に、児童が他の児童の身だしなみを整えさせたね。4月は、先生が指示する場面が多いけど、この学級にはすでに係がいるみたいですね。

——(傍線はゼミ生・以下同)準備運動、齊藤先生はお手本を見せずに、太鼓でリズムをとって指導なさっています。

鈴木 児童の自主性に任せている部分が多いですね。

——教育実習のとき、児童に数を数えさせるなど児童主体で準備運動を行わせると、徐々に体操に集中しなくなってくると指導されました。このクラスは、しっかり体操をしていますね。

鈴木 楽しそうに行っていますね。この3週間でしっかり学び方のルールをつくったんですね。

(2) ぐねぐねリレー(基礎感覚づくり)

——前時に学んだ走る際のポイントを、先生が児童に確認しています。

鈴木 「今、小股で走る」と、子どもが発言したね。

——ぐねぐねリレーのコースに移動しました。同じ形状のコースが2つあって、4チームが2チームずつに分かれて、競争するみたいですね(図1)。

鈴木 コースがぐねぐねで、スタート位置も違って、おもしろいね。先生がこの白線を引く準備をするのは大変そうだけど。

(※授業者より：授業前の休み時間に、ラインカーを両手にもって引いています。1コース3分ほどで引けます。)

——走り出しました。次走者以外きちんと座っていて偉いですね(写真1)。

鈴木 うん、安全指導が、行き届いていますね。応援の声も、結構出しています。

——応援だけでなく、アドバイスもしています。齊藤先生が「いいアドバイスだよ」と声掛

けている声が聞こえました。

鈴木 走り方に個性が出るね。腕がうまく使えていない児童もいます。今の子みたいに手を横に振ってしまう児童には、正しいアームアクションを教えて、そのほうが走りやすくなることを体感させたいね。

——スタート位置が違うから、どのチームが勝っているのかわからないこともあり、子どもたちが夢中になって走っています。

鈴木 競争って、子どもにとって、やっぱりおもしろいんですね。

——直線とぐねぐねの交じったコースが、児童を走りたい気持ちにさせていると思います。

鈴木 直線を走るときとぐねぐねを走るときで、子どもの走りも変わっているね。子どもなりに工夫して走っているんだね。おもしろい教材です。齊藤先生はどこに立っているんだろう。

——2つのコースの外側にいらっやいます。

鈴木 両方のコースが見えるところだね。全チームがゴールしたら、児童が作戦タイムを始めたようです。

——2回目が始まりました。このコース、1人が走る距離、何mくらいなのでしょう。

(※授業者より：正確には計測していませんが、1周約30mです。)

鈴木 1回目も2回目も、先生がどのチームが勝ったかをあらためて発表しなかったのはいいですね。このぐねぐねリレー、最後にどのチームが勝ったと発表しても、子どもはあまり喜ばないと思います。リレーの最中は競争の気持ちが出るけれど、終わってしまえばどのチームが勝ったかは、あまり重要ではないんだね。

■展開

(1) ポイントの確認

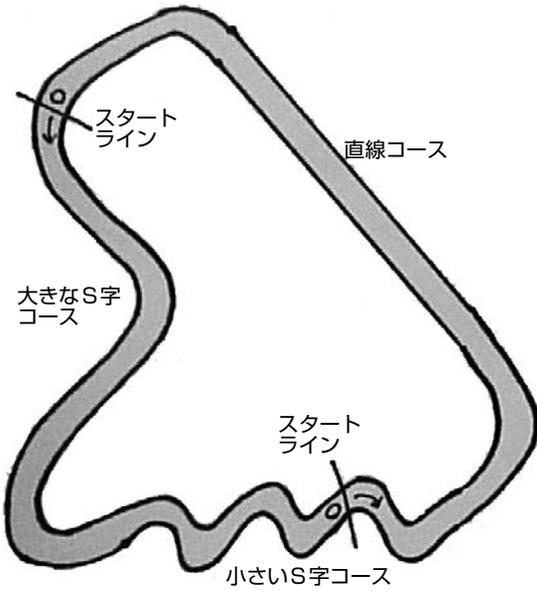
——齊藤先生が、集まった児童に「いい姿勢だね」と声掛けしています。

鈴木 このあたり、学級指導も含めているんだね。——「腕が振れている人がいました」と言う先生に「誰？」と子どもがきいています。

鈴木 子どもから自然と質問が出るのはいいね。齊藤先生が「スタートのとき、視線は1m先。腰は下げる」と指導するとき、「みんなで見つけたんだけど」と前置きしていたね。こういう共有の

【図1】ぐねぐねリレーのコース

※スタートラインは直線コース以外の所に引く。



【写真1】ぐねぐねリレーは次走者以外座っている



しかたはいいと思います。

——4月の最初の単元だからか「アドバイスするときは、丸く集まって座って」と、アドバイスのしかたまで丁寧に指導されていますね。

鈴木 4月にこういう指導をきっちりやっておくと、後々に影響があるんだよね。

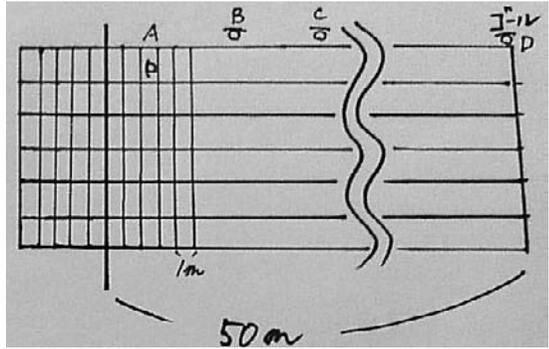
(2) 10秒間走 (前半)

鈴木 今まで10秒間走の授業を見たことがある人はいる？

——(全員が) いえ、初めてです。

鈴木 10秒でどれくらい走れるかを各自が考えて、走る距離を自分で課題設定できる内容です(図2)。この齊藤先生の10秒間走は、p.19の本時の展開にあるとおり、走者以外にもスタートから12mまでを見る人(図2B)、中間走を見る人(図2C)、ゴールの判定をする人(図2D)という役割分担があって、その役割が1回ごとに循環していく点がすご

【図2】10秒間走のコース



【写真2】見ている児童もゴール付近に走る



【写真3】走った後のアドバイスの様子



くいいね。

——「こんなところにいたら、危ないよ」と子どもどうして注意しています。

鈴木 「10秒間走」に取り組むのは3時目ということもあり、子どもたちが各自の役割を理解して自主的に動いているようですね。

——走者が走り終わったら、先生が指示を出さなくても、見ていた児童全員が自然にゴール付近に走って移動していきます(写真2)。

鈴木 見ている役割の児童たちも、アドバイスするためにゴール付近に走っていくから運動量が確保できるんですね。みんなが走っていく姿がかわいいね。よくできた教材だと思います。

——腕の振りについて、アドバイスしている子どもが多いようです。

鈴木 「話し合いがうまくいかないグループに教師が介入」と指導案に書いてあるけど、うまくいっていないグループは、なさそうだね(写真3)。

【写真4】10秒間走の中間指導



——第2走者の10秒間走がもう始まりました。テンポがいいですね。

鈴木 授業がテンポよく進むから、勢いを感じますね。先生は、毎回違うグループに声掛けするみたいですね。

——この回のアドバイスタイムも、腕の振りについて話している声がよく聞こえてきますね。

鈴木 それだけ腕の振りについて指導されているのでしょうか。

——スタート位置は何本もスタートラインが引かれています (p.21図2)。

鈴木 同じくらいの位置からスタートする児童が多いね。スタート位置を決めるのは、完全に子どもの自主性に任せているのかな？

(※授業者より：スタート位置は、自分で決めさせています。年度初めの授業なので失敗したくないと考える児童も多く、安全圏のスタート位置を選ぶ児童が多いです。)

——10秒以内にゴールする、というルールですが、速い児童は8秒ぐらいでもうゴールしてしまっていますね。

鈴木 見ている子どもたちの前を、走る子どもはあっという間に過ぎていってしまうね。もうちょっと走者について見てもいいかもしれない。もしくは、見させる位置を変えるか……。

——疲れからか、走者以外の見ている子どもの移動速度が、最初の回に比べるとゆっくりになってきましたね。

鈴木 腿の動きを見る担当の児童は、ちゃんと確認できているかな。

——あ、児童を集合させました。ポイントを共有する場面になるようです。

鈴木 ゴール付近に、ほとんどの児童が集まっているタイミングで集合。集合のさせ方に無駄がないね。そして、ゴール付近だけ日陰になっていま

す。計画どおりかわからないけれど、集合場所として適切だね (写真4)。

——子どもたちに「どんなアドバイスをしたか」と聞いています。

鈴木 先生が「Aさんが言っていたけど」と、知識を共有しているね。子どもからの意見だと強調するのはポイントだね。

——「肘がこう曲がっているか見てあげよう」とアドバイスのポイント^{ポイント}を具体的に指示されています。

鈴木 やはり腕の振りを重視していますね。

(3) 10秒間走 (後半)

——再び10秒間走が始まりました。

鈴木 これは最後まで、同じ活動を繰り返すのかな。役割が変わってはいますが、10秒間走だけを何度も続けていて、子どもたちの集中力が落ちてきている気もしますね。

——見ている役割の子どもたちも、徐々にアドバイスの量が減ってきているように見えます。

鈴木 最後の数分は2組ぐらいに分けて、もっと大人数で一斉に走らせたり、挑戦課題を別に設定したりしてもいいかもしれないね。

——同じ児童が2走目を走るときは、前回より長い距離を走るようにしているのでしょうか。

鈴木 見ているだけではわからないけれど、「前回よりスタート位置をライン〇本分後ろにする」などの挑戦課題があるのかもしれない。挑戦課題をどう設定しているかは、聞いてみたいですね。

——徒競走と違い、ゴール付近で走者以外の子どもたちから、あまり歓声があがりませんね。

鈴木 そうだね。走る児童も、「ゴールした！ やった！」みたいな喜びは薄いかもしれない。

——アドバイスの様子を離れて見ていると、どの児童が走者だったかわからないですね。

鈴木 アドバイスに重点をおく授業で、それはうまくいっているね。けれど、この展開だと児童に「10秒以内にゴールできた」という喜びや達成感^{達成感}は湧きづらい部分もあるかもしれない。……そろそろ全員2回走り終えたかな。

■まとめ

鈴木 時間配分が完璧です。予定していた時間ぴったりで進行していて、さすがだと思います。

——授業の振り返りを行うようです。

鈴木 齊藤先生が今、さりげなく立ち位置を45度くらい変えたのは、縦に広がっている子どもたちの側面に移動して、子どもたちとの距離を縮めるためだね。みんな（ゼミ生）も将来こういうテクニクが自然と行えるようになるといいね。

——「いいアドバイスがあったか」をたずねています。「腿を上げるようにアドバイスを受けました」とのことですね。

鈴木 答えさせるだけで終わってしまったけど、ここは児童の言葉を拾って、もう1回問い返してあげてもよかったかもしれません。

運動量を確保し、友達どうしでアドバイスをし合うという目標も達成し、45分間できっちり終わる。齊藤先生ご自身の中で指導に迷いが無い、すばらしい授業でした。

■授業を参観したゼミ生の感想

ゼミ生1 ぐねぐねりレーは3つの要素があり、思わず走りたくなるおもしろい教材でした。ただ、ぐねぐねりレーと10秒間走のつながりは少し見えづらかったです。また、10秒間走の、プレイ（楽しむ）部分は、最初は勢いがありましたが、後半は子どもたちの熱中度が落ちてきているようにも見えました。子どもどうしの学び合いが、非常によくできている授業だと思いました。

ゼミ生2 児童が「走るのが嫌だけど、しかたなく走っている」という授業を実習でしてしまったことがあります。本授業は違いました。ぐねぐねりレーは、足が速い児童と遅い児童が心理的に

同じスタートラインに立てているように見えました。後半、少し意欲が落ちていたように感じたので、新しい課題を設定してもよかったかもしれません。中継で聞こえた範囲では、腕の振り方についてのアドバイスが多い印象でしたが、最後の振り返りでは腿の動きについての話が児童から出ていて「腿についても見ていたんだ」と驚きました。ゼミ生3 年度初めの授業でしたが、運動とアドバイスの切り替えが早く、きびきびしており、決まりごとが守れるクラスだと感じました。単元選択の理由としては、運動会が近いので、陸上を取り上げ、フォームを教えたのかなと考えました。ゼミ生4 児童各自の挑戦があるように見えました。ぐねぐねりレーは、同じコースで2回走っていましたが、2回目はスタート位置を交代する方法もあるかなと感じました。他の人のアドバイスを取り入れるのは、学級づくりの面でもよいと思います。友達と一緒に運動すると楽しい、協力すると気持ちいいという本時のねらいは、子どもが実際に感じていたのかを聞いてみたいです。

ゼミ生5 全体を通してスムーズな進行の授業だと感じました。「アドバイスをした人に拍手」という言葉が印象的でした。どの児童も、運動量が確保できていた点がすばらしいと思います。10秒間走は6コースあり、真ん中のコースが横からは見えづらいので、3コースと4コースの間に少し空きをつくるなど、コースの設置を工夫すると、もう少し見る役割の児童が見やすくなるかもしれないと思いました。（談）

☞授業者（齊藤慎一先生）より

今回、このような勉強の機会を与えていただきありがとうございます。私はこの時期の体育を学級づくりの基盤として捉えています。理想的なクラスにするための具体的な指導ができるのも体育のよさだと思います。今回、子どもたちは自分ができるだけでなく「友達もできるようにさせたい」と考えられるようになりました。また、授業の課題点を知ることもできました。スタート位置を下げられるかどうかという挑戦課題にもっと子どもたちを熱中させることが大切だと気づきました。そしてそれは、安心して挑戦できるクラスの雰囲気が必要であるとも感じました。これらを同時に高めることが、この時期の体育では重要になってくるのだと思います。

☞講評者（鈴木聡先生）より

クラス替えてすぐの授業で、「学び方を学ぶ」プロセスが手に取るようにわかりました。ほんの数回の体育の授業であれだけの姿が見えるところに感動しました。ぐねぐねりレー、10秒間走ともに、子どもたちが夢中になって走る姿が、伝わりました。「ポイント」をアドバイスし合うことは達成されていました。10秒以内にゴールできたらスタート位置を下げてさらに挑戦するという本来のおもしろさを子どもがどう実感していたのかは気になります。ゴール場面で「やったー」という歓声や、「スタート位置をもっと下げろぞ!」という様子が見えると、より教材の価値と子どもの興味・関心にフィットした学びになると思います。単元全体の様子をまた聞かせてください。



スポーツの神様を垣間見た！

マニー・ラミレスと溝口和洋

ジャーナリスト 岡崎 満義

野球がつなぐボストンと高知

4月21日付朝日新聞スポーツ欄の片隅に、「ラミレス、7月末で契約満了」という小さな記事を見つけた。

「野球の独立リーグ、『四国アイランドリーグ Plus』の高知は20日、1月に入団した元大リーガーのマニー・ラミレス(44)との契約が7月末で満了すると発表した。同リーグは6、7月が中断期間のため、ラミレスのリーグ戦への出場は5月までとなる。球団によると、ラミレスは外国人選手の移籍期限が7月末となっている日本野球機構(NPB)の球団への移籍を目指す」として

としている。

ひょっとして、かつてボストン・レッドソックスでオルティスと組んで主砲として活躍したラミレスが日本のプロ野球に入って近々テレビでその雄姿が見られるのではないか。心おどるニュースである。

実は少し前、四国の友人から高知新聞のコラムの切り抜きを送ってもらっていた(4月9日付)。これが近頃読んだ新聞コラムで最も感心したものだ。高知にやってきたラミレスについてのものだ。

「『マニー・ラミレスがこんなちっちゃい球場でやっているなんて。そのギャップが、とても面白い』と思ったそう。語りの主はスコット・デュマスさん(29)。ジョン万次郎の故郷で働きたいと8年前、海を越えて来た。高知で知り合った奥さんとの間に2人の子どもができ、教室を開いて英語を教えている。マニー選手が全盛期に所属した、レッドソックスの大ファン。故郷の住まいはチーム本拠地のボストンまで1時間ほど、車や電車で、球場までよく通ったという。忘れられないのは全米を制した2004年のシーズンと、翌年4月のブルージェイズ戦で

放った特大アーチ。打球はコカ・コーラのボトルを飾った照明を越え、球場外の電車軌道にまで達した」。

『すごいバッター、最高のスーパースター』『面白いことや変なこともいっぱいする。そんな彼のことをみんなが好きで、マニー、ビーイング、マニー(それがマニーです)とみんな言うんだ』

コラムの筆者は報道部長の石井研さんでラミレスファンの高知在住のスコット・デュマスさんを発見したことが、このコラムの面白さを倍増させた。プロスポーツは観客、ファンあって成り立つものだ。スター選手の活躍に一喜一憂するファンがあってこそ、そのスター選手はさらに光を放つ。ボストンで全盛時代のラミレスを見たデュマスさんが、十数年後ボストンから遠く離れた高知の小さな球場でラミレスと思いがけず出会うというのは何という幸福であろうか。コラムは続く。

「底冷えの高知球場は声援がしみじみと響く。ボストンの巨大なスタジアムでは小さく、粒にしか見えなかったマニーが、目前に大きく見えた。カンと打球音。空いた三遊間を狭く抜いた。塁上でマニーは両手を突き出すポーズの後、うれしくてたまらないというようなしぐさで、両足をばたばた動かした。『マニーがダンスをしている。楽しそう。一本のヒットを喜んで。それに一生懸命。アメリカにいたころ僕の弟がよく試合に出ていた、フェンスのない小さい野球のグラウンドに、まるでマニーがいるみたいだ』

野球がラミレスとファンのデュマスさんをつなぎ、ボストンと高知をつないだのである。私はこのコラムを読んですぐ、筆者の石井さんに「ラミレスとデュマスさんをつなぐボストン・高知の二都物語を取材して記事にしてくれませんか」と葉書を出した。

コラムの最後はこう結ばれている。

「マニー・ラミレスの見せる野球は昔懐かしい、路地裏を夢中に走る野球とダブって見える。年相応に楽しく懸命に生き、プレーすることに価値があるのだ。どこに行こうと関係ない。『ちっちゃい球場の大きなマニー』が、全力で語っていた」

このコラムを読んで、私はマニー・ラミレスはベースボールの神様に心底愛されている、と思った。大リーグのボストン、独立リーグの高知、どこであろうと喜々として野球を続けるラミレスに、私はベースボールの神様は間違いなく存在するのだ、と思うのである。ベースボールの神様に愛されたラミレスは、どんな土地、どんな球場でも喜々として全力でプレーをしてくれる。なんとうれしいことだろう。

恐るべき常識破り

2016年度ミズノスポーツライター賞の優秀賞の1作に、上原善広さんの『一投に賭ける 溝口和洋、最後の無頼派アスリート』（角川書店）が選ばれた。この作品を読みながら、ここにもスポーツの神様が透けて見えるような気がした。

溝口和洋はやり投げのアスリートで、1989年、当時の世界記録に僅か6cm及ばない87m60を投げた、いわば日本人ばなれしたトップ選手である。

「高校のインターハイにはアフロパーマで出場。いつもタバコをふかし、酒も毎晩ボトル一本は軽い。朝方まで女を抱いた後、日本選手権に出て優勝。(中略)根っからのマスコミ嫌いで、気に入らない新聞記者をグラウンドで見つけると追いまわして袋叩きにしたことがある……」という破天荒な“全身やり投げ選手”を18年間取材して書き上げたのがこの本である。しかも、その書き方は一人称で押し通すという、ノンフィクションの手法としては珍しい、綱渡り的な方法で書き上げている。

溝口は陸上競技を引退したあと、郷里で農業を継いだ。トルコキキョウ作りである。

「四五歳で農業を継ぐまで、私はやり投げ選手だったこともあるし、コーチをしていたこともあるし、パチプロとして生計を立てていたこともある。結局のところ、農業もパチプロも、根底はやり投げと共通している。(中略)トル

コキキョウの栽培は、それ独自の難しさはあるものの、作業自体はやり投げのトレーニングよりも遥かに楽だ。(中略)私が経験してきた地獄に比べれば、農業など天国だ」

その地獄のトレーニングが詳細に書かれているが、素人の私には想像もつかないほどの“地獄”ぶりにただ驚くだけである。

「誰かが言ったことや、陸上界で常識と言われていたことは、『本当か?』と、必ず疑問に思うようにして、自分で実践して納得するまで取り入れなかった。その結果わかったことは、『常識と言われていることのほとんどはデタラメだ』ということだった。やり投げを極めるのに、近道などない」

こうしてコーチにもつかず、自分だけで考え抜いてトレーニングに打ち込むのだ。例えばタバコに関しての溝口流は……、

「タバコも一日二箱は吸っていた。タバコはリラックスするために吸うので、試合の前には必ず二、三本は吸っていた。(中略)タバコを吸うと持久力が落ちるといいますが、タバコは体を酸欠状態にするので、体にはトレーニングしているような負荷がかかるから事実は逆だ。タバコを吸うと階段が苦しくなるというのは、単にトレーニングしていない体を酸欠状態にしているからだ。また『タバコは健康に悪い』と言う人がいるが、どう考えてもやり投げの方が体に悪い。一生健康でいたいのなら、やり投げをやめた方がよほど健康的だ」

誇り高いメジャーリーガーという常識のカベをヒラリと飛び越えて、ボストンから極東の地の高知までやって来て、ヒットを打てば喜びのダンスを披露するラミレス、陸上競技のやり投げの常識を根本から疑って、独自の生活体系を生み出した溝口和洋、似ても似つかぬこの2人の肩に、愛すべきスポーツの神様はフワリと乗ったようである。常識の王道を脇目もふらず歩き続ける才能のあるアスリートは世の中の人たちの絶賛を浴びるだろう。マニー・ラミレスや溝口和洋のように常識はずれの道を歩くアスリートにも、気まぐれなスポーツの神様がそっと肩のあたりに乗ってくれるような気がして、それを想像するだけでもうれしくなってくる。これぞスポーツと言いたくなる。

おかげで、みつよし／一九三六年鳥取県生まれ。京都大学文学部卒業後、(株)文藝春秋入社。一九八〇年、スポーツグラフィック誌「ナンバー」創刊にあたり初代編集長となる。その後各誌の編集長を歴任し、退社後はジャーナリストとして活躍。近著『人と出会った』が岩波書店より好評発売中。

こんなとき、どうしよう？ 体育の授業づくりQ&A



回答者：東京学芸大学准教授 鈴木 聡

Q. 研究授業の際に、どんな視点で授業を見たらよいのかわかりません。また、先輩の先生に、「協議会では質問や発言をするとよい」とアドバイスされますが、何を言ってよいのか迷います。どうしたらよいでしょうか。（2年目：女性）



A. 授業観察する際に大切なのは、「授業記録」をとることです。配布される指導案の余白にメモを書く方を見かけますが、できれば授業記録用のノートなどに書いていくとよいと思います。さて、そこに何を書いたらよいのか、どんな記録を残せばよいのかということですが、まずは自分が「見たいものを見ればよい」ことはいうまでもありません。しかし、初任期の先生方からは、それこそ「見たいもの」がわからないというお話をよく聞きます。私も小学校の教師をしていましたが、自身の初任期を振り返ると確かにそうでした。授業を参観するときには、授業全体を観察することも大事ですが、まずは「視点」を決めて見るとよいと思います。例えば、「教師行動」を徹底的に追いかけて、と決め、授業者の先生の発問、言動等に注目して観察し、記録します。「逐語記録」に挑戦してみるのも手です。授業中に発する教師の言葉をすべて記録します。すると、教師は実にいろいろな言葉を発していることがわかります。例えば、次に何をするのかを示す「指示」や、活動をしている児童への「声かけ」があります。「声かけ」であれば、励ましたり褒めたりするものもありますし、技能ポイントを提示したり、もっとこうするとよいと具体的な言葉かけをしたりするような発話もあり、多岐にわたるはずで、発話

だけでなく、子どもたちと一緒に喜んだり残念がったりする行動や表情に注目し、それを記録していくと、そのときの教師の意図や手だてを解釈したり、読みとったりすることができます。参観していて、「どうしてこういう声かけをしたのだろう」という疑問を抱くようであれば、それも記録に書いておくといいです。

子どもたちの学びの様子をじっくり観察することも視点のひとつです。児童の発話やつぶやき、表情に注目し、やはり記録していくのです。体育は、身体的な活動が多いので、その様子を記録するのは難しいかもしれませんが、例えば跳び箱の学習であれば、何回くらい技に取り組んでいるのか、どんな技を選んでいるのか、それが時系列でどのように変容していくのか、といった視点で観察して記録することが考えられます。ボールゲームであれば、例えば何回くらいボールに触っているのか、パスはどれくらい成功してシュートは何本しているのか、という視点でカウントしてみることで見えてくることもあるかもしれません。ゲームのめあてが「作戦を生かしてゲームをしよう」であった場合、どんな作戦を選んだり、つくったりしているのか、それがゲームで実現しているのかどうかを丁寧に観察して記録していきます。このような記録があると、そうした授業における子どもの「事実」から、授業の目標や授業者が構想したねらいと子どもの実態が合致しているのかどうかを解釈していくことが可能となるはずで、

漠然と授業を観察しては気づかないことがたくさんあります。反対に、授業をしっかりと観察し、授業、教師、児童の事実を記録していくことで「授業が見える」ようになっていきます。見えたものをどのように解釈していくのかも、経験を通してその幅が広がるものです。初任期の頃は、研究協議で発言するのも勇気がいると思います。しかし、上述のように授業記録を取って授業の解釈を試みていくと、自ずと授業者に聞いてみたい

ことや「自分は観察していてこの事象をこのように解釈した」という意見を述べてみたくなると思います。「質問しなければ……」「何か意見を言わないと……」という義務感で臨むのではなく、「質問したい」「意見を述べたい」という内発的な思いや切実性が伴ってこそ意味があり、実りある協議会に参加できたと実感することにつながるはずです。他の教師の授業であっても、「研究授業から学ぶ」「自分ならこうする」という当事者性をもって参加し、「事実」を記録し、解釈し、他の教師の見方と自身の見方を照らし合わせることで、実践力や授業力が身につくはずで、もちろん、授業の記録を取ることに集中しすぎて全体像が見えなくなる参観は元も子もありませんので、可能な範囲で授業記録をとることはいうまでもありません。

Q. 校内研究の推進役をしています。研究協議会では、一部の教師しか発言しなかったり、議論が活発にならなかったりします。何か良い方法はないでしょうか。
(13年目：男性)



A. 校内研究会や官制の授業研究会に参加すると、質問のような光景はよく見られます。私は体育科の授業研究にかかわるようになって27年になりますが、研究協議会を活性化させたいという願いは、推進役の先生にとっては今も昔も変わらないようです。しかし近年は、ワークショップ型にしたりグループディスカッションを取り入れたりと、工夫された研究協議会に出会うことが多くなりました。様々な手法があると思いますが、2例ほど紹介します。

小グループによるディスカッションを取り入れた例でいえば、まず始めに授業者以外の参観者が付箋などに意見を書きます。1枚につき1項目書くのがポイントです。共感的な意見は桃色の付箋、質問や課題だと感じた意見は水色の付箋に書くと、整理するときに便利です。書き終わったら、模造紙などに、付箋を貼りながらグループで意見交換をします。同じような意見は付箋を近づけて貼り

カテゴリー名をつけます。「子どものはつらつとした姿は、教師の明るい声かけが引き出している」というような解釈になれば、カテゴリーを矢印でつないだり、同じ事象に関する話題でも共感的な意見と課題だと感じる意見が出た場合は、対立的な矢印でつないだりしながら構造化していきます。最後にグループごとに話し合ったことを出し合っ

て共有し、いくつかの質問に対して授業者が答えたり、出された意見に対して授業者なりの解釈を述べたりして全体会を進めます。

ワールドカフェという手法を取り入れている学校もあります。これもいくつかの方法があるのですが、例えば4つのグループに分かれテーブルに着きます。第1テーブルは「教師行動」、第2テーブルは「児童の姿」、第3テーブルは「指導案や提案内容」、第4テーブルは「45分間の授業構成」などとテーマを決めます。10分程度その内容でディスカッションし、時間が来たら別のテーブルに移ります。このとき、1人だけそのテーブルに残り、新しく集まったメンバーに、今まで出てきた話題を簡単に紹介します。10分後、またテーブルを変えます。ここでも1人だけ残り（先ほどの人とは別の人）、新しいメンバーに話題を伝えます。4ラウンドして、すべてのテーマについて議論したことになります。テーブルに残った人は3つのテーマしか議論できなかったことになりますが、最後に着いたテーブルの代表者が今までの議論を報告することで、全体で共有できるしくみです。この方法は、実にたくさんの参加者と議論ができた実感を得られます。また、小グループで何回も議論するため、発言も多くなります。何より、多角的な意見が出され協議会が活性化します。全体共有の後には、司会者が議論を整理して授業者にコメントを求めたり、さらに意見交換したりと腕の見せどころです。

これらの方法は、「手法」です。大切なのはそこで何が話されるのか、どんなことが議論されるのかということになります。初めの質問の回答に書いた通り、1人ひとりの教師が授業を真剣に観察し、記録を取り、授業の事実を解釈し、それが上述したような手法を用いて議論されれば、有意義な研究協議会になると思います。くれぐれも「手法先にありき」にならないようなファシリテイトが、研究推進役には求められるといえます。